

「賀古駅家、発掘ものがたり」6 <文字に残る賀古駅家>

〔播磨国風土記〕

〔賀古郡〕。(中略)

昔、大帯日子命、誂^ニ印南別嬪^一之時、(中略)賀毛郡山直等始祖息長命^{一名伊志持}、為^レ媒而、誂^ニ下行之時、(中略)以後、別嬪掃^レ床仕奉、出雲臣比須良比売、給^ニ息長命^一。墓有^ニ賀古^西。

〔駅家里〕。由^ニ駅家^一為^レ名。

〔令義解 卷第八 廐牧令第廿三〕

諸道置驛條

凡諸道須^レ置^レ驛者。每^ニ卅里^一置^ニ一驛^一。若地勢險阻。

及^ニ無水草^一處。隨^レ便安置。不^レ限^ニ里數^一。其乘具及菴笠等。各准^ニ所置馬數^一備之。

(中略)

諸道置驛馬條

凡諸道置^ニ驛馬^一。大路^頭。山路^頭。其大路以^ニ廿疋^一。中路^頭。東海道^頭。

其目外當^ニ二十疋^一。小路五匹。

(後略)

3つめの研究は文献、伝承についてです。これらは古代山陽道、駅家の場所を特定する際に利用されてきました。

伝承には教信沙弥に関係するものがあります。それは『日本往生極楽記』という10世紀末頃の書物に「私は賀古駅の北辺りに住む沙弥教信です」(『日本往生極楽記』10世紀末の書物)と書かれていたもので、沙弥がご本人の住所を賀古駅家との関係で示されています。現在の教信寺が沙弥のご住所だとすると、賀古駅家はその南側、すなわち古大内の賀古駅家推定地にあたるわけです。

また、古大内と教信寺の間にある池が「駅ヶ池」と呼ばれており、こうした地名からも賀古駅家が近くにあったことを示しています。地名には1,000年以上前の歴史が刻まれていることを示す好例の一つです。

他の文献資料を見ますと、様々な具体的な様子がわかります。「賀古駅」という名称は古くは『播磨国風土記』(713年頃)に登場しており、その頃の野口町周辺は「駅家里(うまやのさと)」と呼ばれていたようです。そして、他の文研には、駅家は30里(現在の16km)ごとに設置されていたこと(播磨はなぜか8kmごと)、駅家には馬が常駐され、賀古駅家では25頭(807年以前)→20頭(807年以降)→40頭(927年ごろ)と変わっていき、一時は全国最多の40頭という馬数を常駐させていたこと、などなど。

しかし、あたりまえの話ですが、文献は文字だけの情報であって、具体的に駅家はどこにあったのか、どれぐらいの大きさだったのか、どんな施設だったのか、など、記さ

れなかった部分については何も語ってられません。

このような謎は発掘調査の得意とするところです。考古学、文献史学、人文地理学、時には自然科学（これについては後述）など、お互いの不足部分を補いながら駅家研究は進んでいかなければなりません。

今回の発掘調査成果は駅家研究に何をもたらすことになるのか、それは、どこをどう発掘するのか、にかかっています。

兵庫県立考古博物館 学芸員 中村 弘